

Title	「延慶本」における天変地異と歴史的事件との連関性： 辻風と大地震をめぐって
Sub Title	
Author	久松, 宏二(Hisamatu, Koji)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1985
Jtitle	三田國文 No.4 (1985. 10) ,p.20- 28
JaLC DOI	10.14991/002.19851000-0020
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19851000-0020

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「延慶本」における天変地異と歴史的事件との連関性

——辻風と大地震をめぐって——

久松 宏 二

はじめに

『平家物語』における靈驗譚・前兆が、その物語世界の素材となる歴史的諸事件を因果関係として説明し、有機的な連関を作り出していることは生形貴重氏によって指摘されている。⁽¹⁾氏はその中で「物語の重要な事件が一応終結し、あらたな歴史的展開が予想される重要な箇所には、天変地異が描かれる」とし治承三年の清盛によるクーデター事件の記事の直前の辻風と地震の記事をその一例として取りあげている。

本稿はこのことを前提とした上で、この二つの天変地異がその後展開する歴史的イベントと、どのように連関しているのかを考察するものである。その際、生形氏が「諸本に比べ冥衆への視線が明瞭である」とした「延慶本」をテキストとして諸本との対照を行なう。⁽²⁾また、天変地異の解釈の方法となる夢告や卜占、即ち陰陽道の中で重要な人物とされる安倍泰親についても若干の考察を加える。

尚、諸本については「増補系」⁽³⁾として「延慶本」⁽⁴⁾「四部合戦状本」⁽⁵⁾（以下「四部本」とする）「長門本」⁽⁶⁾「源平盛衰記」⁽⁷⁾（以下「盛衰記」

とする）を、「語り系」として「屋代本」⁽⁷⁾「寛一本」⁽⁸⁾をそれぞれ使用する。

〈辻風荒吹事〉と重盛説話

まず〈辻風荒吹事〉とその後に展開する一連の重盛説話との関わりを考察する。その際一連の重盛説話は諸本間で大きな異同がみられるので、それについても重盛の子言者の性質を中心に、諸本の章段配列に留意しつつ検討を加える。

尚、一連の重盛説話とは、表一に記したように、重盛の死去を予兆する〈辻風荒吹事〉から〈小松殿大國ニテ善ヲ修シ給事〉までとする。

〈辻風荒吹事〉の記事は『玉葉』などによれば治承四年（一一八〇）四月二十九日が史実であり「延慶本」「長門本」「盛衰記」「屋代本」「寛一本」はこの史実を無視していることが知られている。⁽⁹⁾そしてこのことは、次に起こる重盛死去という事件の前兆とするために成された虚構であるとされている。⁽¹⁰⁾

その内容は、京中に辻風が吹き、家が倒れ人畜が死んだことに対

表一へ一連の熊野詣説話〈諸本対照表

延慶本 第二本	四部本 卷第三	長門本 卷第六	盛衰記 卷第十一	屋代本 卷第三	覚一本 卷第三
辻風荒吹事―①		旋風事―①	旋風事―①	五月二日 辻風事―①	颯―①
小松殿死給事―②	重盛死去―②	重盛逝去事―②	大臣所勞	小松内府熊野參詣事 ―③ a	醫師問答
小松殿熊野詣事 ―③ a b	重盛熊野參詣―③ a 醫師問答―③ b		事―③ b ②	同内府病惱事―③ b 同死去事―②	―③ a b ②
小松殿熊野詣由來事 ―④			燈爐大臣事―⑥	無文―④	無文―④
小松殿大國ニテ善ヲ 修シ給事―⑤	金渡―⑤		育王山送金事―⑤	燈爐之沙汰―⑥	金渡―⑤
			經俊入ニ布引滝ニ事―⑦		

△備考▽・「閑靜録」は欠卷。

・「四部本」の辻風の記事は卷四に配されている。

・算用数字は同じ内容を示す

・③ a ↓重盛熊野詣の記事

② b ↓重盛病氣の記事

④ ↓熊野詣の理由と夢想の記事

④ ↓夢想の記事

して、神祇官陰陽寮が共に

百日ノ内ニ大葬^{オホウツリ}白衣之恠異天子大臣之御慎也就中重祿^{オホウツリ}大臣ノ
慎ミ別ハ天子大ナル怖亂^{オホウツリ}仏法共滅ヒ兵革相續テ飢饉疫癘ノ
兆ス所ナリ

と占うというものであり、この占いによって辻風が重盛死去の前兆として位置づけられるのである。つまり、ここで生形氏の言う天変地異と歴史的事件との関連がつけられるわけである。

さて、占いの記述についてであるが、この占いが陰陽師によってなされているということから、そこには予言的性質が考えられる。そして次の「小松殿死給事」の冒頭には「八月一日小松内府臣重盛公薨給ヌ」とあり、この占いがすぐの中としたとしている。

諸本では「延慶本」と同様に重盛死去の記事が辻風の記事の次にあるのは「長門本」(巻第六・重盛逝去事)「盛衰記」(第十一卷・大臣所勞事)で、その他の諸本は表一の通り離れている。このことから「延慶本」「長門本」「盛衰記」の辻風の記事は予言的性質が強く、同時に辻風と重盛死去との関連性も強調されていると考えられる。

「小松殿死給事」には、重盛死去のものと重盛賞讃の記事がみられる。そしてこれと同様なものが「長門本」の「重盛逝去事」である。ところが「長門本」は、前章段の「旋風事」とこの章段だけで、重盛関係説話が終わっており、他諸本と比べても大きな異同を生じている。

「小松殿熊野詣事」は重盛が熊野詣をする章段であるが、その理由が諸本によって違っている。つまり「屋代本」(巻第三・小松内府熊野參詣事)と「覚一本」(巻三・醫師問答)が「小松のおとよ、

か様の事共(辻風の占い・筆者注)を聞給て、よろづ御心ほそやおもはれけむ」(醫師問答)と辻風での占いを聞くことによって、熊野詣をするのに対して「延慶本」「盛衰記」は辻風での占いを聞く以前に、重盛自身の夢想によって熊野詣をするのである。

詳しく言えば「延慶本」の熊野詣は、その本文により六月十三日以前であることがわかるのであり、辻風以前にあたる。また「盛衰記」も「旋風事」の前に「小松殿夢熊野詣事」が配列されており、そこに「同き年(治承三年・筆者注)五月」とあることから同様に考えられる。そしてこの両者は、熊野詣をする理由を重盛自身の夢想によるものとしているのである。それは「延慶本」の「小松殿熊野詣ノ由來事」に

抑此大臣ノ熊野參詣ノ由來ヲ尋レハ夢故トソ聞ヘシ去三月三日
夜ノ夢ニ

とあり、また「盛衰記」でも同様の記事があることから知られるのである。(因みに、重盛の夢想の記事は「覚一本」(無文)にもみられ、重盛の予言者の性質が示されているが、その夢想によって熊野詣をするのではなく、辻風の記事によってするのである。従って「覚一本」では、辻風と重盛死去との関連性がかえって希薄になっていると考えられる。)

以上の如く「延慶本」「盛衰記」「覚一本」は重盛の夢想到予言者の性質がみられ、特に前の二本は、熊野詣と関連づけられておりその性質が効果的に描かれているといえよう。また、辻風の記事での予言的性質とあわせて「延慶本」「盛衰記」は予言的性質が強いと考えられる。

ところで、この二本を比較した場合「延慶本」では「辻風荒吹事」

の後に重盛死去という事件が展開していくのに対して「盛衰記」では違っている。すなわち「辻風事」の前に「小松殿夢同熊野詣事」が配されているのである。そしてこのことから辻風の記事にかかる予言的性質の比重の違いが生じるわけであり、配列上、辻風の記事と重盛死去との連関を最も効果的になしているのは、その比重の強い「延慶本」の方であると考えられる。一方「盛衰記」は熊野詣の記事を先に配列することで、重盛の予言的性質をより前面に押し出していると思われる。

「小松殿熊野詣ノ由來事」は前述した重盛夢想のことと、兼康も同じ夢を見たという記事から成っている。

諸本では「覚一本」〈無文〉・「盛衰記」〈小松殿夢同熊野詣事〉が「延慶本」と同様、重盛が夢想したと同じ夢を兼康も見たとして兼康が重盛の所に報告にくるのであるが、この時の重盛に違いがみられる。すなわち「延慶本」は、源大夫判官李貞が「兼康カ上ニ申入ヘキ子細ノ候トテ參テ候」と重盛に言うと「大臣聞給テ哀レ妹尾（兼康・筆者注）ハ此夢ヲミタルコサムナレト思食」すのである。つまり、兼康の話を書く以前に重盛は、その内容を予知していたということなのである。そしてこのことは「盛衰記」の場合も大体同じである。それに対して「覚一本」では

さて兼康見たりける夢のやうを、始より終までくはしう語り申けるが、おとこの御覧じたりける御夢にすこしもたがはず。さてこそ、瀬尾太郎兼康をば「神にも通じたる物にてありけり」と、おとこも感じ給ひけれ。

というように重盛は、兼康の夢の話を予知せず、兼康に予言的性質があることを逆に知るのである。

以上のことから「延慶本」「盛衰記」の重盛は「覚一本」のそれよりも予言的性質が強いといえよう。

「小松殿大國ニテ善ヲ修シ給事」は、重盛が後世のために黄金二千三百兩を宋國に送り田地を買って育王山に寄進するという内容で、ここには「惣テ此大臣ハ吾朝ノ神明佛陀ニ財ヲ投給ノミニ非ス異朝ノ佛法ニモ帰シ奉ラレケリ」とあるように仏法に帰依する重盛が描かれている。尚、この章段は「四部本」（巻第三・金渡）「盛衰記」〈育王山送金事〉・「覚一本」〈金渡〉にみられるが、内容に大きな異同はない。

また「延慶本」にはない章段として「盛衰記」に「燈爐大臣事」・「綵俊入ニ布引滝ニ事」、「覚一本」に「燈爐之沙汰」がある。これらは、重盛の理想者の性質を描いているが後に増補された章段として考えられている。

以上「辻風荒吹事」と重盛死去との連関性、並びに、一連の重盛説話について考察を加えた。その結果として次のようにまとめることができよう。

① 辻風の記事を前兆として、重盛死去を記すという連関性は諸本にみられ「増補系」〈盛衰記〉「長門本」「延慶本」ではそれが強調されている。中でも「延慶本」は最も効果的に関連づけられている。

② 「延慶本」「盛衰記」は予言的性質が強くみられ、特に「盛衰記」では重盛の予言的性質の強調と同時に、より一層の理想化も図られている。

〈大地震事〉と泰親

次に〈大地震事〉と清盛クーデター事件との連関性を考察する。まず、諸本間での地震の記事の有無、及び章立ての仕方についてみると、この章段は「延慶本」「四部本」「盛衰記」「屋代本」「寛一本」に認められる。その中で「屋代本」には〈七月七日大地震事〉の前に〈小督局事〉がある。それは「人ノ心モ替リ不思議ノ事多シ」として清盛専横のことを記した章段で、このことから「屋代本」では、清盛クーデターの前兆としての地震以外に清盛自身の悪行を記しているということができよう。そしてこれは同時に、地震↓清盛クーデターという連関性を希薄にしているとも考えられる。また「寛一本」では〈法印問答〉の前半部に地震の記事を配しておりそれだけ一つの章としては立てていない。これに対して「盛衰記」には〈大地震事〉の前に〈將軍塚鳴動事〉がある。その内容は、將軍塚が三度鳴動して国中に伝わったというもので、諸本では他に「延慶本」の〈大地震事〉にみられる。また、地震の記述も詳細であり、以上のことから「延慶本」「盛衰記」は「語り系」等比べて天変地異を強調していることがわかる。

次に地震の記事の内容について検討を加える。前述したように地震の記事は「長門本」を除く諸本にあり、同時に清盛クーデター事件と関連づけられている。そして、この連関を作り出す役割をするのが、陰陽師・安倍泰親である。すなわち、「延慶本」では七日の地震の後「八日早且ニ陰陽頭泰親院御所へ馳參テ申ケルハ去夜ノ戌時ノ大地震ナノメナス重ク見候」と予言をする。それに対して法皇が「天変地異ハ常ノ事ナリ然而今度ノ地震強ニ泰親力騒申ハ殊ナ

ル勘文ノアルカ」と尋ねると、泰親は「占文」を挙げ「佛法王法共ニ傾キ世ハ只今ニ失候ナムスコハイカメ仕候ハムスル以外火急ニ見候ソヤ」と答え、はらはらと泣くのである。このように泰親の予言によって、その後の事件との関連がつけられるわけであるが、この予言に対する周囲の反応が諸本によって異なっている。まず「延慶本」では

傳秦ノ人モ淺猿思ケリ君モ叡慮ヲ驚シオハシマス仏家ニモ院中ニモ御祈被始ケリサレトモ君モ臣モサシモヤハト思食ケリ若殿上人ナムトハケシカラヌ陰陽頭カ泣様カナサシモ何事カハ有ヘキナムト申アハレケルホトニ(傍線筆者記す。以下同)

とある。つまり、①の如く泰親の予言を大部分の人々が肯定し祈禱を始めるのである。それに対して「盛衰記」では

公卿僉議有て、泰親御前にして荒言を吐き、叡慮を奉るニ申驚一條奇怪也、遠は七箇日御大事たる由、占文其效なき上は、速に土佐の畑へ可被流罪ニせと定められ

として泰親の予言を強く否定する。また「四部本」では、「御祈始被行之程」と祈禱は行なわれるが「延慶本」のようにすぐにはなく、泰親の二度にわたる予言によってやっとなされるのであり、「屋代本」「寛一本」では①の一節がないのである。そして「語り系」では、わかき殿上人の評として「けしからぬ泰親が今の泣やうや、何事の有べき」とてわらひあはれけり」と記した後

②され共、此泰親は晴明五代の苗裔をうけて天文は淵源をきはめ、推条掌をさすが如し。一事もたがはざりければ、さすの御子とぞ申ける。いかづちの落かゝりたりしか共、雷火の為に狩衣の袖は焼ながら、其身はつゝがもなかりけり。上代にも末代

にも、有がたかりし泰親也。

と賞讃する形をとっている。しかしこの場合の賞讃は、地震に関する泰親の予言力に対してではなく、単に陰陽師泰親に対する知識としての賞讃であるといえよう。それは②の記述から考えられるのである。

以上の如く、泰親の予言は、それに対する反応から「延慶本」が最も効果的に描かれていると考えられる。そしてすでにみた章立てや配列との関わりから、地震→清盛クーデターという連関は「延慶本」が最も効果的になされていると考察される。

ところで、清盛クーデター関係記事の後、平家諸本にはあらためて、地震を清盛クーデター事件の前兆として捉えた一節がある。すなわち「延慶本」では「法皇ヲ鳥羽へ押籠奉ル事」で

去七日大地震ハカムル淺猿キ事ノ有ヘカリケル前表ナリ——^①とあり、更に「陰陽頭泰親朝臣馳参テ泣々奏聞シケルモ理ナリケリ彼泰親朝臣ハ」以下前述した「語り系」と同じ泰親賞讃の文章がつづくのである。(以上を⑥とする)。「延慶本」のこの賞讃は、地震に関する泰親の予言に対してのそれであると考えられ、泰親は他の諸本に比べて重要な位置を占めているといえよう。

他の諸本をみると「屋代本」「覚一本」では③が、「盛衰記」では④・⑤が同様にあるが前述した如く、前者は地震の予言を賞讃しているとは思われず、後者も一度その予言を否定しており、「延慶本」の泰親のように重要な位置を占めてはいないと考えられる。また、地震の記事のなかった「長門本」は、ここで初めて七日の地震が前兆だったことを記し泰親を賞讃する。更に泰親が落雷にあうも死ななかつたとして他諸本に比べて長い話をつづけ、このことを聞

いた法皇に「泰親はたゞものに非ず」と言わせるのである。しかし、この部分を認めるとしても、他諸本のような地震と清盛クーデター事件との連関性は極めて希薄であるといえよう。

以上へ大地震事」と清盛クーデター事件との連関性について考察を加えた。その結果として次のようにまとめることができよう。

①地震の記事を前兆として、清盛クーデター事件を記すという連関は一応諸本にみられ「延慶本」は最も効果的に関連づけられている。

②陰陽師泰親の予言によって、この関連がつけられるのであり「延慶本」ではその予言は強調・賞讃されており、泰親は重要な位置を占めていると考えられる。

『平家物語』における天変地異と歴史的事件との連関について「辻風荒吹事」へ大地震事の二章段をとりあげて考察を加えた。その結果「延慶本」にその連関性が効果的に認められたのである。そしてその要因としては次の二つが挙げられよう。すなわち一つは、配列・章立ての仕方であり、一つは陰陽師(泰親)の描かれ方である。そして特に後者の描かれ方については「延慶本」の性質を考えていく上で検討されるべきことであると思うが、これまでのところまとまった論はみつけれない。そこで次に「延慶本」の泰親について、諸本との比較検討を行ない今後の足がかりとしておきたい。

「延慶本」の泰親

すでに言われているように院政期の陰陽道は、めまぐるしい政局の推移とたび重なる天災、更に末法思想による社会不安を背景としその関心が一段と高められた時代である。そしてこの時代には、阿倍・賀茂両家による独占世襲化がなされており、陰陽博士は両家はほ対等に任じ、曆博士は賀茂氏独占、天文博士はほとんど安倍氏が占め、陰陽道は賀茂氏の独占体制にあったとされている。こうした中で阿倍氏として久しぶりに頭に任ぜられたのが泰親である。泰親は陰陽道泰長の子で、晴明から五代の末裔に当たり、その占驗のほどは『玉葉』にもしばしば記されている。また、説話の世界では『続古事談』第五・諸道の中に「祇園社焼失（久安四）ノ御時……泰親ウラナヒ申テ云ク。六月壬癸日。内裏焼亡アルベシ」とあり、それが当たると「ウラハニシテ七アタルヲ神トス。泰神ガウラハ七アタル。上古ニハチズトゾ鳥羽院仰ラレケル」とその占驗の程が言われるのである。

さて「延慶本」における泰親についてであるが、まず泰親の登場する章段名を挙げると〈中宮御産有事〉〈大地震事〉〈鳥羽殿ニイタチ走廻事〉〈太政入道他界事・付様ノ佐異共有事〉〈新帝可奉定之由評議事〉となる。

〈中宮御産有事〉は言仁親王（安徳天皇）誕生と御産に関しての珍事（時晴の失敗譚等）が記されており、その中に

泰親ハカリソ御産只今也皇子ニテ渡セ給ヘント占申タリ

とあり、それが見事の中したと記されている。諸本では「四部本」「長門本」「盛衰記」に同様にみられ「長門本」では更に泰親と時晴の術比べ譚が挿入されている。ところでこうした術比べ譚は『月刈藻集』にもみられ、そこでは晴明と播磨国の道摩が長持の中身を当

てるという話になっている。この話では両者互いに譲らず、最後に晴明が呪力で中身を別の品に変えて勝利を収めるのである。「長門本」での話はこれと類似しているが、そこに登場するのは晴明・道摩ではなく、泰親・時晴となっている。この話が何故ここに挿入されているのかについては今後の課題としたいが、『平家物語』の世界では、陰陽道の中で泰親が時に秀れた人物として描かれているということはこのことから言えよう。

〈鳥羽殿ニイタチ走廻事〉は、御所で多くのいたちが騒いだのを、法皇が泰親に占わせると「三日ノ間ニ悦ヒト奏聞ス」と予言し、院がまもなく鳥羽殿での幽閉の状態から脱却するという吉事に結びつけている。そしてこのことが実現したとして泰親は「イミシカリケル巫哉」と賞讃されるのである。これに対して「寛一本」「盛衰記」が、いたちの出現を「吉事と凶事」の子兆とし、この後に展開する以仁王の謀叛事件の伏線として描いていることは言われている。しかし泰親への賞讃はみられず、このことから〈大地震事〉のと同様に「延慶本」は泰親の予言を賞讃しており、その結果泰親の存在を比較的意識する——重要な位置を占める——傾向にあると思われる。また「長門本」では吉事が泰親によって予言されるが、それに対する賞讃はみられない。

ところで「四部本」では、いたちの出現のことや泰親の予言のこととは記されておらず、このことから他諸本との先後関係が論じられてきたわけである。ここではそれについての言及はしないが、今までみてきた如く「延慶本」「寛一本」「盛衰記」には、靈驗譚とそれを予兆する人物（この場合は泰親）を物語の中に位置づけようとする意識が明確にみてとれるのである。

〔新帝可奉定之由評議事〕は「泰親ニ日次ヲ御尋アリケレハ」と新帝の御位の日次を泰親に占わせるのであり、諸本ではこの泰親の占いは「長門本」にだけある。

以上の如く、泰親の記事は「増補系」に多くみられ、特に「延慶本」では歴史的事件との連関性を高める上で泰親の予言力が賞讃され、重要な位置を占めていると考えられるのである。

おわりにかえて——「延慶本」

の重盛・文覚——

「延慶本」において、天変地異とその後に展開する歴史的事件との連関性は諸本の中で最も効果的になされており、その役割を負った陰陽師（泰親）が重要な位置を占めていることを考察した。

ところで「延慶本」では泰親のような予言者の性質（不思議の能力）を持った人物は、その造型のされ方が他諸本（特に「語り系」）に比べて違っていると思われる。そしてそうした人物としては重盛と文覚が挙げられるのである。そこで最後に「延慶本」と「覚一本」における両者の造型のされ方の違いを検討することで「延慶本」の性質について若干の考察を加えておきたい。

まず重盛については『平家物語』において理想的人物として造型されており、その理想化が「覚一本」において一層推し進められていることが言われている¹⁶⁾。そしてその理想的側面は王法佛法を擁護する人物として、清盛との対照の上に成されているのであるが、一方では運命の予言者としての側面も考えられるのである¹⁷⁾。

ところで「延慶本」と「覚一本」との予言者の側面を比較した場合、すでに〈辻風荒吹事〉で論じた如く、前者に最も強くその側面

がみられるのに対して、後者ではそうした側面よりもむしろ、清盛に対する儒仏の具現者としての重盛像の方がより強調されていると思われる。すなわち「延慶本」は個々の歴史的事件とその前兆としての天変地異・靈験譚が有機的な連関性を保持しているため、それぞれが集約的に連続して描かれるのであり、同時にそこではその予言者の不思議の能力も集約・強調されるのである。それに対して「覚一本」は、そうした集約的な個々の歴史的事件が、平家興亡史という一つの長い因果論的論理によって統一されるため、必然的に予言者の側面よりも、清盛に対する王法佛法擁護者としての側面の方が強調されるということなのである。そして以上のことは次の文覚についても同様に考えられる。すなわち「延慶本」における文覚は、伊豆配流の途中のありさまが詳述され、靈験に即して頼朝に謀叛を促す人物としての不思議の能力が集約的に連続して描かれているが「覚一本」ではそうした側面よりも、平氏一門に関わる人物として六代助命に奔走する文覚像に重点がおかれているのである。

以上の如く「覚一本」（「語り系」）は、平家興亡史を因果的な論理によって統一していくという一面をもっているため、予言者の側面（不思議の能力）を有する人物像は、その特徴が拡散され弱まってしまうのである¹⁸⁾。それに対して「延慶本」はそうした個々の人物像を集約的に描くため、その特徴が強調されるのであり、ここでの平家興亡史は、そのように強調された説話群がつけられることによって形成されていると考えられるのである。

注1

生形貴重「平家物語における「語り」試論——靈驗譚・前兆をめぐって——」（『同志社国文学』第九号所収）、「平家物語」・その叙述の基層——冥衆への視線とモノガタリ——の構想、延慶本を中心にして——」（『日本文学』第三十卷四号所収）

2 生形貴重「平家物語」・その叙述の基層——冥衆への視線とモノガタリの構想、延慶本を中心にして——」

3 古典研究会刊行の影印本による。

4 慶応大学斯道文庫蔵の影印本による。

5 国書刊行会本による。

6 有朋堂文庫本による。

7 角川書店刊の影印本による。

8 日本古典文学大系本による。

9 「延慶本」「長門本」「盛衰記」では治承三年六月十四日、「覚一本」では同年五月十二日、「屋代本」では同年五月十五日のこととしている。

10 信太周「『歴史そのまま』と『歴史ばなれ』」（『文学』三四卷第十一号所収）

11 「屋代本」「四部本」にはこの章段はない。ただし「覚一本」と共に「天性このおとゞは不思議の人にて未来の事もかねて悟り給けるにや」という一節だけはみられる。

12 本文では他の諸本と同様、この地震は十一月七日に起きたことになっている。

13 村山修一「院政期の陰陽道」（『史林』五三卷二号所収）

14 平家物語必携・馳之沙汰の項等

15 佐々木八郎氏は「四部本」の記事を「覚一本」の先出形態としたのに対して、水原一氏は「四部本」の記事は「延慶本」のごとき本文からの略述であるとした。

16 川田正美「重盛像の造型と変貌」（『日本文学』第二九卷十一号所収）

17 このことは、重盛と同様に儒仏の具現者として賞讃される高倉帝に比べて、重盛の賞讃のされ方がはなはだしく勝っていることから言えるのである。

18 このことは佐伯真一氏によって指摘されている。佐伯真一「平家物語の因果観の構想」（『同志社国文学』第十二号所収）

19 例えば、「延慶本」に比べて「覚一本」では、兼康の不思議の能力

が強調されているが、それによって重盛の子言者の側面は拡散され、逆に弱められると考えられる。（小松段熊野詣ノ由来事）における重盛と兼康については——（辻風荒吹事）と重盛説話——で論じた。）